

非賣品

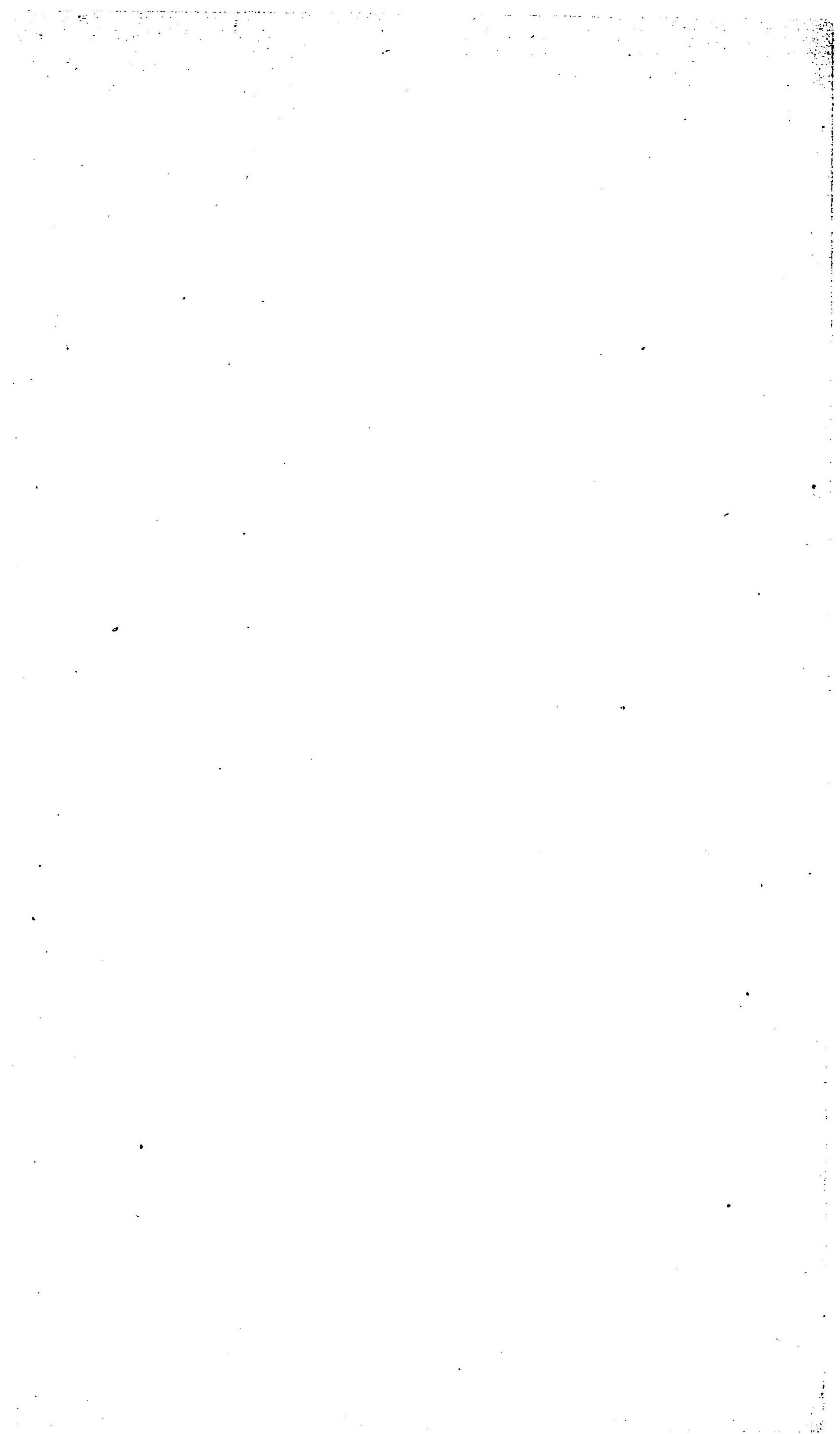
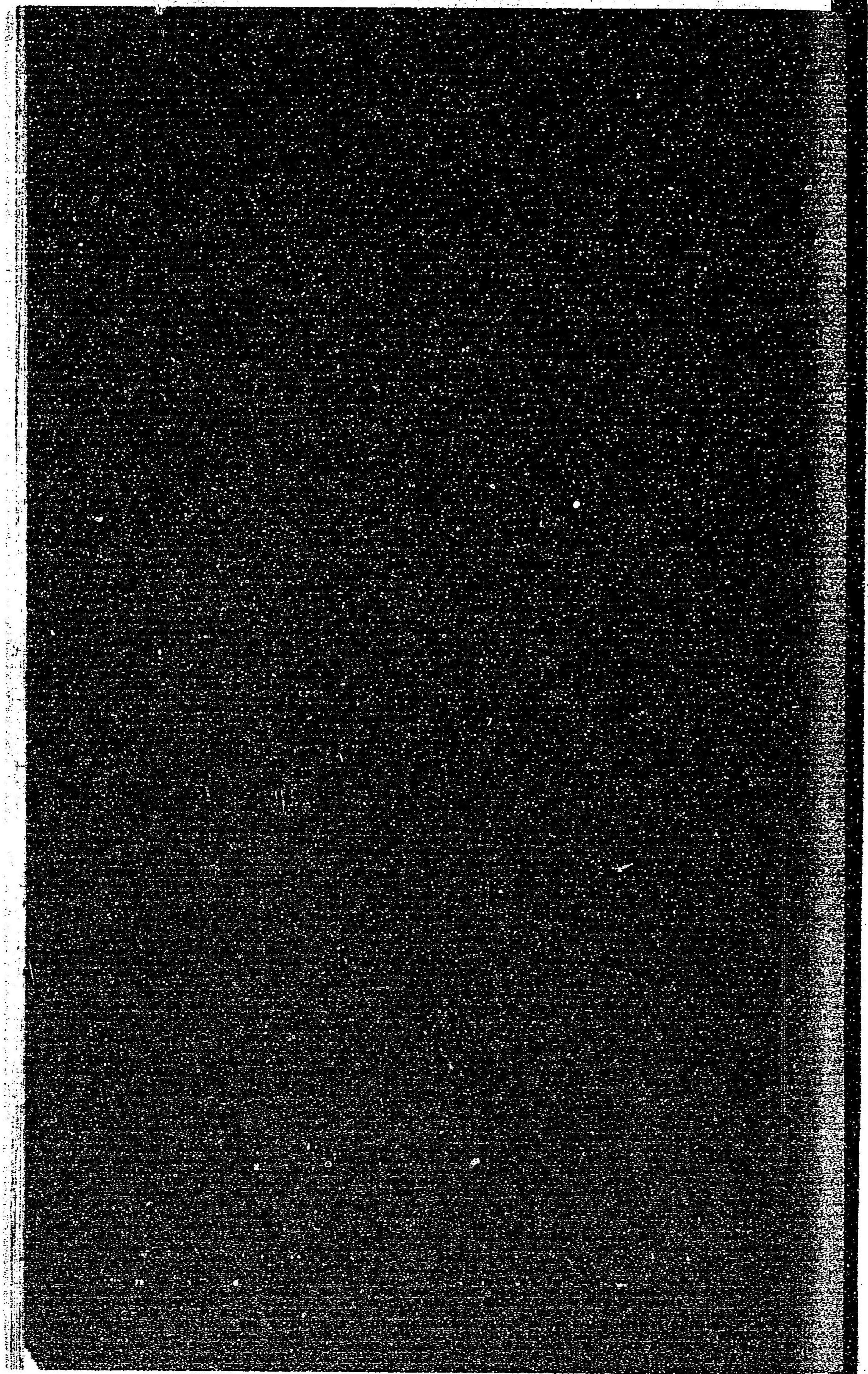
中學讀本
四卷
參考書

全

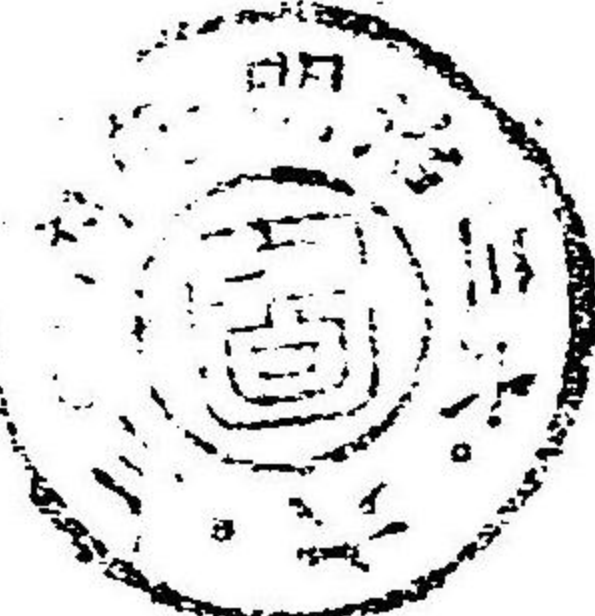
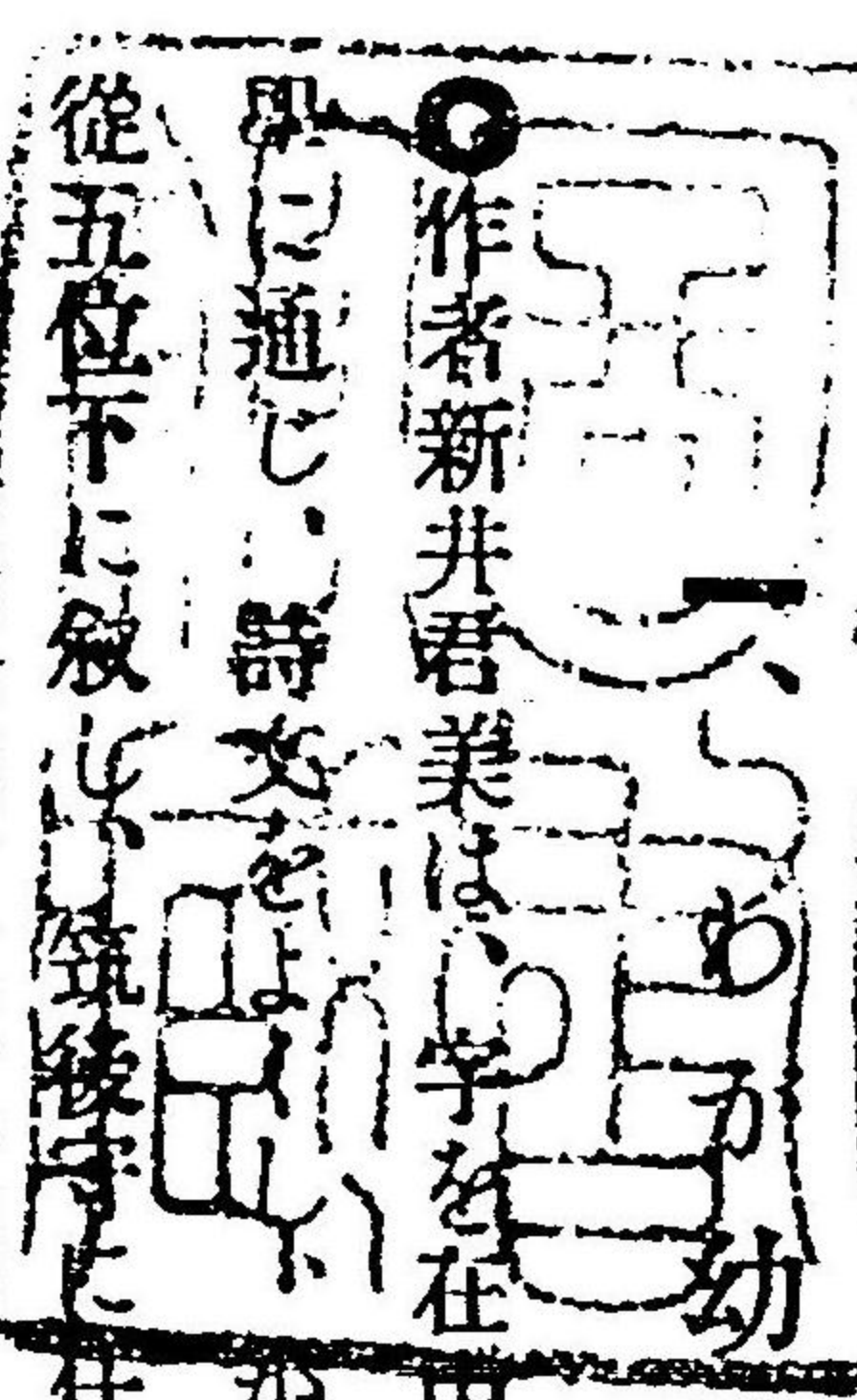
明治書院編輯部編
明治書院發行

22

62



中學讀本卷四 參考書



○作者新井君美は、字を在甲といひ、號を白石といへり。木下順庵の門に遊び、博く、和漢の學に通じ、詩文をよみ、かねて、經濟の才に長せり。將軍家宣に仕へて、頻に寵用せられ、從五位下に叙じ、筑後守に任ぜられしが、享保十五年五月十五日に卒せり。著書百五十餘部、中につきて東雅、同文通考、讀史餘論、折焚柴の記、藩翰譜、本朝軍器考等、最も有名なり。『折焚柴の記』は、白石の自叙傳にして、上中下三卷あり。書名は、新古今集なる後鳥羽上皇の、「思ひいづる、をりたく柴の、夕烟、むせぶもうれし、忘れがたみに」といふ、御歌によりて、名づけたるなり。

○上野物語 その頃、ありし物語なることは、明なれど、いかなるものか、詳ならず。○草紙 草雙紙のことにはあらで、物語などの書をさしていふ草紙の義なるべし。○寛永寺 上野の岡にあり。天台僧正の開基にして、天台宗に屬す。○透寫 スキウツシなり。○往來物 日用文を集めたる書の稱にして、尺素往來、明衡往來、庭訓往來、消息往來などの類をいふ。○戸部 戸部は、民部の唐名なり。こゝにては、久留里侯民部少輔土屋利直のことをさせり。○太平記の評判 太平記よみといふこと、當時大に行はれて、今の講談の如く、面白く、その事實を講説評論せるものあり。

りしが、それを太平記の評判といへり。文明年間に出版せられたるものに、和田助則著の太平記評判理無極鈔といふもの五十卷あり。○利根 心根の利發なるをいふ。○庭訓往來 玄惠法師の著にして、日常往復の書簡文を、漢文めかしく書きたるものなり。玄惠は、後醍醐天皇の侍讀たりし人にして、程朱の學にくはしく、詞藻に巧なりき。

二、高價の笛

○フランクリンは、名をベンジャミンといひ、西曆一千七百六六年を以て、北米合衆國のポストン府に生る。貧困の間に人となり、幼より苦學して、その心を練り、常に躬行を重んじ、節制、沈黙、規律、決斷、節儉、勤勞、誠實、正義、温和、清潔、寧靜、貞操、謙退の十二徳を選びて、これを修養せむことを期し、手帳に、その徳目を記し置きて、日毎にその行を省み、過ある時は、その徳目の下に黒點を附して、これを再せざらむことをつとめたりとぞ。合衆國獨立戦争の起るや、佛國に赴きて援助を乞ひ、歸りて、また、國事に奔走し、盡力せる所、頗る多し。擧げられて、もろもろの要職に就き、皆、令名あり。千七百九十年、八十四歳の高齡を以て歿す。全國、悲悼せざるものなし。フランクリン、また學術に長じ、ことに、電氣の學にくはしく、その上に偉大なる學説の發明をなして、長く、この學の祖と仰がれぬ。

三、フッシュ博士の逸事

○ヘッセン國王フィリップ第一世 ヘッセンは、獨逸聯邦の一なり。フィリップ第一世は、千五百〇年を以て生れ、父王には、はやく別れしかば、千五百〇九年を以て、母后攝政の下に、王位に即き、次いで、千五百十八年に、親ら、政務に任じ、千五百六十七年を以て、薨せり。○國都 ヘッセン國の首府マールブルグにして、レーン河に沿へり。○ヘルマン、フッシュウエストハーレンの一貴族にして、人道論者の哲學者として、有名なりし人なり。ウエストハーレンは、獨逸西部の地にして、彼の三十年戦争の後、この地にて、締結せられたる、所謂、「ウエストハーレンの條約」によりて有名なる地なり。氏は、一千四百六十八年に生れ、一千五百三十四年に死せり。

四、太宰春臺

○作者原善の傳は、卷一、三一、「徂徠惜分陰」の條に出でたり。

○太宰春臺 名は純、字は徳夫、通稱を彌左衛門といふ。春臺はその號なり。又、紫芝園と號す。信州飯田の人なり。はじめ父に従つて江戸に來り、後、去つて京都に行き、五畿の間に流浪すること十年、舊友安藤東野の招きに應じて、再び江戸に來り、東野に介せられて、物徂徠を見、大に、その識見に服し、遂に、舊學を捨て、その古學を講習す。徂徠、また、頗る、これを推重す。徂徠の歿後、弟子、皆、來りて春臺に投じ、名聲、一世に高く、諸侯大夫、また、來りて教を乞ふもの、頗る多し。性、剛毅狷介、人、望んで畏敬せざるものなし。延享四年五月晦日歿す。年六十八。著書、頗る多し。○巖郵侯 濃州惠那郡岩村の城主、(三萬石)松平乘賢なり。老中に任せられ、

從四位侍從に叙せらる。世子は乘蘊ノリモリといひて、林述齋の生父に當れり。○艷然 論語に「色艷如也」孟子に「曾西艷然不悅」などあり。「盛氣色也」と解せり。○傲岸 岸には、魁岸などいひて、雄偉といふ如き意あり。また、「露額」といふ如き意もあり。傲岸とは、傲り高ぶりて、對手を眼下に見下す如きさまをいへり。○用捨窮達 用捨は、その人を擢用し、また、その人を棄捨するころにて、任用する人の方にかけていひ、窮達は、志を得ずして窮し、また、志を得て榮達するころにて、任用せらるゝ人の上にかけていへるなり。○渠 はカレとよむ。字書に、「俗謂他人爲渠儂」とあり。○六經略說 易經、書經、詩經、春秋、禮記の五經に、樂經を加へて、六經といへり。また、上の五經に、大學、論語、孟子、中庸の四書を加へて、六經ともいへり。これは、後の方の諸書を略説せる書なるべし。

五、示塾生

○作者柴野邦彦は、通稱を彦輔といひ、栗山と號し、又、古愚軒と號す。讃岐高松の人。江戸に出でて、業を林家に受け、學成りて、阿波侯に仕ふ。後、京都に住して、頻に、宋學を唱道せしが、天明八年、召されて、江戸に出で、昌平齋の儒官となり、學名、一世に高かりき。文化四年十二月一日、年七十四を以て歿す。

○龍養小鳥者云々 鶯の飼養の事は、はやく、足利氏の世に起りたれど、そのあまねく行はるゝに至りしは、江戸時代よりのことにして、ことに、天明より文化以後に至りて、最も、その流行を

極め、諸侯富豪の徒、皆、競うてこれを養ひ、十代將軍家治、十一代將軍家齊は、御小納戸に御鳥掛の役をさへ置かれたりき。○蹇然 音窳、蹇と同義なり。「疾也、不安靜也」と、字書にあり。○一瞬 瞬は、廣顔に「鳥吟」とあり。○戢翼 戢、音、シフ、ヲサムとよむ。詩經小雅に「鴛鴦在梁、戢其左翼」とあり。注に、戢は「斂也」とあり。○疑立 嚴整たるさまにて立ち居るをいふ。疑立の字は、儀禮に出で、儀禮にては、疑立とかけり。詩經大雅に、「靡所止疑」とありて、注に、「疑、讀如儀禮疑立之疑、定也」とあり。○諦聽 諦は審なり。即ち、よく注意して聴くとの義なり。諦は、また見る方にも用ゐて、諦視ともいふ。○縱轉 縱は、ホシイマ、とよむ。爾雅に「亂也」とありて、前漢書王古傳に「放從自若」とあるを引證せり。○劉亮 劉は、普通、瀏に作れり。瀏亮は、字書に、「清明之稱」とあり。こゝにては、その聲の清明なるをいへるなり。○希賢 周濟溪の言に、「聖希天、賢希聖、士希賢」とあり。小學外篇にも引けり。○可以人而不如鳥乎 大學に、「詩云、緡蠻黃鳥、止于丘隅、子曰、於止知其所止、可以人而不如鳥乎」とあり。

六、著作の刻苦

○作者瀧澤解の傳は、卷三、二一、「瀧澤馬琴」の條に出でたり。

○天保 仁孝天皇の年號。○八犬傳 本書は、南總里見氏の勇士、八人の事蹟を根據として組織せる歴史小説にして、五十三卷あり。二十八年の刻苦を経て、始めて完成せるもの、實に、著者畢生の大作にして、また、徳川時代文學の一大傑作たり。○癸巳 天保四年なり。○己亥 天保十年。○

まどろもどろに まどろにを、更に、甚しくいふ語にて、甚しく打亂れての意。○人のために謀りて云々 論語學而篇に、曾子曰、吾日三省吾身、爲人謀而不忠乎、與朋友交而不信乎、傳而不習乎」とあり。○**缺舌侏離** ゲキセツシュリ 蠻夷の言語の、解すべからざるをいふ。孟子の滕文公篇に、「今也南蠻缺舌之人、非先王之道」とあり。趙註に、「缺博勞鳥也」と見え、後漢書南蠻傳に、「語言侏離」註に、「蠻夷語聲也」と見えたり。

七、文字の死活

○作者菅音卿は、字を禮卿といひ、茶山と號す。備後神邊の人。年少くして、京師に遊び、那波魯堂に従ひて、洛陽の學を受けたり。後、郷に歸りて、一塾を築き、黃葉夕陽村舎と號す。山陽南海の子弟、率ね、茶山に従ひて學ぶ。詩名、殊に高く、海内第一と稱せられたり。文政十年八月十三日、年八十にて歿す。詩稿を黃葉夕陽村舎詩といふ。『筆のすさび』は、四卷あり。月蝕、雷臍をとる事、小豆の降りたる事、黒氣以下、見聞せることを録せる隨筆なり。○**三尋** 尋は、ヒロと訓ず。凡そ六尺をいふ。小爾雅には、「四尺謂之仞、倍仞謂之尋」とありて、八尺のこととせり。

八、室鳩巢に與ふる書

○作者新井君美の傳は、この卷、三、「わが幼時」の條に出でたり。

○**室鳩巢** 名は直清、鳩巢は、その號なり。木下順庵の門より出でて、徳川幕府の儒官たり。駿河臺に住せしより、世に呼んで 駿臺先生といへり。將軍吉宗の統を繼ぐや、侍講となりて、まばらば、その諮詢を受け、畫策する所多し。鳩巢、また文章に長じ、著書甚だ多し。ことに、駿臺雜話は、世に有名なり。享保十九年八月十二日、年七十七を以て歿す。○**拮据** 能く事を勉むる意なり。詩經豳風に、「予手拮据、予所挈茶」とあり。註に「口足爲事、曰拮据」と見えたり。○**書籍をたのみて云々** 學者よろしく博く書を読むべし。されども、たゞ、書物にのみ拘泥せず、よく、考慮を費さむことを要す。孟子の、「盡信書、則不如此無書」といひしは、このことなり。○**令郎** 御子息の意なり。鳩巢には二男あり。一は、洪謨(字は孔彰、通稱は忠三郎)と稱し、一は、早く夭折せり。こゝにいへるは、即ち、洪謨のことなり。○**買田間舎** 書言故事に、「陳登字元龍、許汜與之劉備、在劉表坐上、備與表論天下人物、汜曰陳元龍湖海之士、豪氣未除、昔見元龍、無主客禮、久不相與語、自上下大床臥、使客臥下床、備曰、君求田間舎、言無可采、元龍何縁與君語、」註に、「君備稱汜也、求田間舎、務求安也、采、取也、備意當時漢衰、天下大亂、汜不能救、而自己但知求安、元龍素豪氣、其心倍憂於國、何縁與君語」とあり。○**監本四書** 監本とは、國子監(大學の如し)といへる官寮にて、命を奉じて、校正したる官版の書をいふ。○**茅鹿門史記** 明の茅鹿門といふ人の、評せる史記なり。史記は、百三十卷あり。漢の司馬遷の撰。黃帝より、漢の武帝に至るまで、上下三千年間の事どもを記せり。文章、雄道偉麗、紀傳體の祖にして、後世史家の典型たり。○**漢書** 漢書には、前漢書と後漢書とあり。普通

に漢書といへば前漢書を指す。さて、前漢書は、後漢の扶風の人、班固の撰びし所にして、前漢十二代、二百三十年間の歴史なり。十二帝紀、七十列傳、十志、八表、すべて、百卷あり。體裁は、史記に則りたれども、それよりも、稍、整へり。後漢書は、百二十卷あり。本紀十卷。列傳八十卷は、宋の范曄の撰びしもの、志三十卷は、晉の司馬彪の撰びしものなり。唐以前は、各、別書なりしが、宋の乾興中、合せて一書となせり。○同門 白石も鳩巢も、共に、木下貞幹(順菴)の門弟なりし故に、いふなり。○秦風與子同袍 秦風は、詩經中に、秦の國風を歌へる篇の名なり。秦風の無衣に、「豈曰無衣、與子同袍」とあり。苦樂を共にする意なり。

九、白石篤朋

○作者原善の傳は、卷一、三一、「徂徠惜分陰」の條に出でたり。
○新井白石 の傳は、この卷、一、「わが幼時」の條に出でたり。○木下順菴 名は貞幹、字は直夫、順菴は、その號なり。京都の人なり。幼にして、はやく俊才の名あり。東山に屏居して、徒に教ふること二十餘年、名聲、天下にあまねし。後、召されて幕府の儒官となり、門下に、一時の俊秀を集めて、木門秀才の名、一世を風靡せり。元祿十一年十二月二十三日、年七十八を以て歿せり。○欲薦諸加賀 薦、音、セン、ス、ムとよむ。易豫卦に、「般薦之上帝」とありて、注に、薦は進也とあり。諸は虛字なり。こゝにては、コレヲとよませたり。○戚然 論語に、「小人長戚戚」とありて、注に、戚は憂也とあり。○負笈 集韻に、「負書箱也」とあり。史記蘇秦傳に、「負笈從

師」とあり。○倚閭 戰國策に、「王孫賈年十五、事閔王、王出走、失王之處、其母曰、女朝出而晚來、則吾倚門而望、女暮而不還、則吾倚閭而望、女今事王、王出走、女不知其處、女尚何歸」とあり。閭は里門なり。それより、親の、子の歸らむを待ち望む義に慣用せり。○擗 音ナン、アツマルなり。司馬相如上林賦に、「擗立叢倚」とあり。○先容 その人の爲に、先づその用ゐるべきことを言ひて、推舉する義なり。漢書鄒陽傳に、「蟠木根柢、輪囷離奇、而爲萬乘器者、以左右先爲之容也」とあり。○釋褐 褐は、毛布の衣にして、寒賤の人の着るものなり。即ち、賤しき衣服を脱ぎすて、衣冠を着くる義にて、初めて仕途に就くをいへり。○甲斐府 六代將軍家宣の、なほ櫻田邸に居られし時にて、甲斐府とは櫻田邸のことなり。家宣は、甲府宰相綱重の子にして、綱重は甲斐を領せしを以て、世に、その居邸櫻田邸を呼びて、甲斐府といへり。

一〇、擇友

○作者貝原益軒の傳は、卷三、二、「旅行の趣味」の條に出でたり。
○人倫 一に、また五倫ともいふ。○五倫 人の最も相親む、五つの倫の義にして、即ち、父子、君臣、夫婦、長幼、朋友をいふ。まかして、これに配して、人の常に守るべき五つの道を五常、また、五敬、五典ともいふ。即ち、父子に親あり、君臣に義あり、夫婦に別あり、長幼に序あり、朋友に信あるべきをいふ。

一一、親友

○作者千頭清臣氏は、舊高知藩の人、明治十三年、文科大學を卒業し、十九年、英國に留學し、歸朝の後、第一第二高等中學、鹿兒嶋造士館教授、高知縣尋常中學校長等に任せられ、二十九年、内務書記官兼參事官となり、累進して、朽木縣知事に至り、宮城縣、新潟縣、鹿兒嶋縣知事等に歷任す。

○立志 齡、既に、立志に及べりとは、十五歳になりしをいふ。論語爲政篇に、「吾十有五而志于學」とあるによれり。

○櫛風沐雨 山野に奔走して、勤勞するをいふ。唐書狄仁傑傳に、「太宗櫛風沐雨、親冒鋒鏑以定天下云々」とあり。

○跋涉 山川を經行くことをいふ。詩經靡風に、「大夫跋涉」傳に、「草行曰跋、水行曰涉」とあり。

○期年 歳一周するを期といふとありて、期年とは、滿一年のことなり。

一二、畫家の苦心

○作者柳澤里恭の傳、及び、『雲萍雜志』の事は、卷三、二八、「種々の生業」の條に出でたり。

○一國寺 昔時、早く廢絶し、今は、大安寺と稱し、禪宗に屬す。徳秀和尚の開基なり。元信の鶴畫、永徳の松畫、利休の手水鉢など、今もあり。淇園の頃、一國寺の名稱、存せしやは、いぶかし。堺市南旅籠町東四町にあり。

○精舍 寺のこと、精練修行人の居る處の稱なり。靈裕寺話に、「非「僂暴」者所居、故云「精」とあり。無量壽經に「講堂精舍」と見えたり。

○千の利休 名は宗易、

泉州堺浦の人なり。茶道を紹鷗に學び、熟得して、遂に、名を一世に博す。初め、織田信長に仕へ、後、秀吉に仕へて、恩遇あり。利休居士の號を授けらる。又、自ら、拋筌齋といふ。天正十九年二月廿八日、事を以て死を賜ふ。恬然として絶命の偈を賦し、腹を割きて死す。時に年七十一。

○古法眼元信 元信は、狩野家第二世の人なり。世に古法眼と稱し、狩野家の泰斗とす。初め、四郎次郎と稱し、後、大炊助と改む。幼にして、畫を父正信に學び、周文を慕ひ、又、小栗宗丹を師とし、夙に、奇童の稱あり。十歳に及び、足利義政の近侍となり、後、畫所預となり、剃髮して、法眼に叙せらる。元信の畫くところ、博く法を和漢に取り、溫良にして細密、滋潤にして清秀、山水、人物、花鳥、共に妙處を窮め、殆ど神品に入る。土佐光信、釋雪舟と、併せて、本朝の三傑と稱せらる。永祿二年十月六日、年八十四にて歿す。法眼は、ハフゲンと讀む、僧位中の第二位なり。

○明障子 今の障子のことなり。古くは、たゞ、障子といへば、今の襖のことなり。

○丹青 彩色のことなり。轉じては、繪畫のことにも用ゐられたり。

一三、那智の瀧

○作者の傳、及び『西遊記』の事は、卷三、三、「霧島山に登る記」の條に出でたり。

○那智の瀧 紀伊國東牟婁郡那智山にあり。那智山には、瀧の數、頗る多く、世に、この瀧をさして、一の瀧といふ。高さ四十八丈、幅十八間あり。古來有名なるものにして、ことに、平家物語によりて傳へられたる、文覺上人の荒行の地として、世に名高し。熊野浦よりして、遠く、これを望

む時は、恰も、白布の、天にかゝれるが如し。○山のたゞすまひ たゞすまひは、もとたゞすみた
 る様子の義にして、轉じて、ありさまの義となる。即ち、山のありさまなり。○堂宇の設 瀧の
 上にありしといふ不動堂などを指せるならむ。今は廢滅して、そのあとをとめず。○巖石峨々
 峨々は、説文に、「峨々、山高」とあり。○羅衣 ウスギヌなり。○瀧壺 瀧の水の落ちたまる所、即
 ち、瀧の下の淵なり。○京の大佛 東山なる大佛殿、即ち、方廣寺の大佛をいふ。但し、こゝは、
 奈良なる東大寺の大佛を書き誤れるものならむか。○越中の立山 高さ、九千四百〇一尺。○大
 隅の國の瀧 大隅國加治木の北にあたりて、龍門の瀧とて、大なる瀧のあるをさせるなり。那智の
 瀧は、幅二三間もあるべきよし、本文に見えたるが、龍門の瀧は、幅五六間もあるべしと南谿は
 記せり。予、漫遊の間に見たる瀧にては、是を第一とす云々」とて、南谿は、龍門の瀧をいたく賞
 讃せり。○廬山の瀧 後漢書の註に、「廬山在尋陽南、東南有香爐山、其上氛氲若香烟」とあ
 り。今の湖南省九江府邊なり。李太白が、「日照香爐生紫烟、遙看瀑布挂長川、飛流直下三千
 尺、疑是銀河落九天」の名吟を得たるは、この瀧なり。

一四、遊箕面山遂入京記

○作者齋藤正謙の傳は、卷二、二八、「摩耶山」の條に出でたり。
 ○在攝 攝は攝津なり。○淡旬 淡は、音セフ、又、カウ、徹す、あまねし等の義あり。こゝにて
 は、アマチシとよませたり。旬は「十日爲旬」と説文に見えたり。○箕面之勝 箕面山にして、

ミノヲ、又、ミノモともよめり。攝津の豊能郡にあり。○畿旬 畿も旬も、共に、支那上古の畿服の
 制によれる九畿の一にして、畿は王城のある所、旬は、王畿に近き所なり。これより轉じて、わ
 が京都の附近なる、山城、大和、河内、和泉、攝津の五國をば、畿内と稱せしが、こゝにては、畿
 旬といひて、その畿内をさしたるなり。○長柄川 攝津國中津川の別稱。淀川の一支流なり。弘
 仁中、こゝに橋を架し、長柄の橋とて、歌などにもよまれたりしが、今は船渡となれり。○盤廻
 盤は、蟠と通じて、集韻に、「曲也」とあり。史記司馬相如子虛賦に、「其山則盤紆窮巒」とあり。
 坂路を迂曲して、登りゆくの義なり。○琅然 琅は玉聲なり。水聲の玉の轉するが如くなるをい
 へり。○磴 石坂なり。○瀧安寺 箕面山吉祥院と稱す。天台宗に屬す。役小角の開基せる所な
 りといひ傳へ、行者等が修験道の靈場として、世に名高し。○渥丹 渥は厚漬の義あり。詩經郊風
 に「赫如渥赭」とありて、正義の注に「言其顔色赫然而赤如厚漬之丹赭也」と解せり。○綺
 綺は、布の縞などの順ならずして、經緯の縦横になれるをいふことばなり。即ち、こゝにて
 は、紅楓の、水石の間に、點々入り亂れて居るをいへり。○杳然 ユッタリとしたる貌なり。○鞞鞞
 鞞、もと磬に作る。鼓聲なり。鞞も同義。こゝにては、瀑布の落下する音にいへり。○望見瀑布
 掛絶壁 即ち、箕面瀧なり。瀧安寺より上ること十餘町許の所にあり。高さ十六丈あり。その上に
 碧潭ありて、龍穴と名づけたり。○轟然 轟は車聲なり。借りて物の音のはげしきに用ゐる。○
 以那智爲第一 那智の事は、前の二三、「那智の瀧」の條に詳なり。○躡磴 躡、音、セフ、字書
 に「登也、又、履也」とあり。こゝにては、フムとよませたり。○從後門云々 瀧安寺の後門より

の意なり。○勝尾寺カツオデラ 攝津の三島郡豊川村粟生勝尾山アハツにあり。眞言宗にして、神龜四年、僧善仲、善算の開基にして、光仁天皇の皇子、僧開成の興立せられし所なりといふ。名所圖會に、「坊舎二十有三、本尊十一面觀音、西國巡禮第二十三番の札所なり」とあり。○觀音大士 觀音は、觀世音を略していふなり。この菩薩は、世人の音聲を觀じて、象生を解脱せしむ。故に、觀世音と名づく。法華經普門品に、「受諸苦惱、聞是觀世音菩薩、一心稱名、觀世音菩薩、即時觀其音聲、皆得解脱」とあり。大士は、菩薩の尊稱。○西國三十三所 所謂西國巡禮といふものにて、佛者のいふ日本の三十三ヶ所の靈地なり。古くより行はれたることにて、拾芥抄に、その名を列記したれど、今いふ所と異同ありて、明ならず。○郡山 大和生駒郡にありて、郡山城趾のある所。もと、柳澤氏の藩地。今は郡山町といひて、その般賑なること、奈良につげり。其角が、「茶の花の中に城あり郡山」と歌ひしは、即ち、こゝなり。

一五、京都

○作者依田百川氏の傳は、卷二、四、「須磨明石」の條に出でたり。
 ○東西北環山 京都は、東に東山あり、西に西山あり、北に北山あり。たゞ、山なきは、南のみ。その南は、即ち、伏見の方なり。○鴨水 鴨川なり。源を山城國愛宕郡の山間より發し、屈曲して東南流し、鞍馬、貴船の兩川を併せ、更に南流して、高野川を合せ、京都市の東部を過ぎて、西南に轉じ、紀伊郡に入りて、立瀬川、その他の溪流を合せて、桂川に瀉出す。○清冽無比 冽は字

書に「水清也」とあり。○往昔桓武天皇云々 桓武天皇の延暦十三年、葛野郡宇太利に地を相して、皇居を造り、都を定め給ひ、同年十月二十二日を以て、車駕新京に遷り給へり。これ即ち今の京都なり。○明治初車駕云々 今上天皇の東京に遷都あらせられたるは、明治元年十月十三日なり。○相距千餘年 この間まさに一千七百七十四年なり。○兵燹 燹は火なり。兵火の意に用ゐらる。○佛刹 刹は、増韻に、佛寺なりとあり。○舊皇居 その外廓は、東、寺町通、西、烏丸通、南、丸太町、北、今出川に及べり。面積二十五萬餘坪あり。その内廓は、外廓の中央にありて、御所は、即ち、この中にあり。○紫宸殿 内廓の正面の南門の中に、更に、宮垣を遶し、承明、日華、月華の三門ありて、この紫宸殿の階下に通ず。所謂、南殿これなり。○清涼殿常寧殿 清涼殿は、紫宸殿の西にあり。中殿にして、常日の宸居なり。常寧殿は、紫宸殿の北にあり。○日月門 前にいへる、日華門、月華門のことなり。○二條城 二城の離宮なり。永祿十二年、信長、始めて、この城を築きしが、光秀のこれを焼きしより、一時、荒廢せしを、慶長七年、家康、新に、工を起し、同八年に落成せり。城樓屋宇、實に、壯觀を極めたり。今は、離宮となれり。○桂宮 下桂にあり。東は、桂川に瀨す。桂御所と稱す。もと、秀吉、家康の奉行して、造營したる建築にして、桂宮家の邸なりしが、近年、離宮となりぬ。殿舎林泉、悉く、幽妙の趣を極めたり。○修學院離宮 元修學院村にあり、もと、後水尾法皇のために、幕府の造營せし離宮にして、山石竹樹の趣、櫻楓の鬱茂せるさま、まことに、幽邃閑雅なり。○加茂 上加茂と下加茂との二社あり。上加茂は、加茂別雷神社カモイカヅチといひ、下加茂は、加茂御祖神社カモミコヤといふ。蓋、川の上流下流にあるを以て、上下を

以て稱するならむ。下加茂神社は(讀本の挿畫に見えたるは是なり)天武天皇白鳳五年の造營にして、社殿の宏壯なること、比近に、その類なし。多々須玉依毗賣命、及び、大山咋神を祭る。上加茂神社は、下加茂より西北、加茂の流を溯ること半里計のところにより。桓武奠都以前に鎮座せし名祠にして、社殿の結構、又、壯大なり。祭神は、別雷神なり。兩社、共に、官幣大社なり。○八阪 祇園新地の東端、東山の麓にある八阪神社のことなり。素盞鳴尊を祭り、稻田姫、八王子を合祀す。官幣中社なり。○北野 北野神社のことなり。天曆年中、民間、私に、菅原道真の靈を祀り、天滿天神と稱したるより、貴賤となく、これを尊崇し、後、遂に、官幣中社に列せられたり。現今の社殿は、慶長年中豊臣秀吉の造營せしものなりとぞ。○護王 護王神社のことにして、烏丸通、櫻鶴田町にあり。祭神は、和氣清麿なり。別格官幣社たり。○智恩院 八阪神社の東北にあり。華頂山大谷寺と稱し、淨土宗鎮西派の總本山なり。慶長八年、家康が寺院の擴張に力を盡し、より、後、屢、回祿の災にかゝりしも、伽藍の壯大なること、洛東第一に居れり。○東西本願寺 本願寺は、真宗本派の本山にして、親鸞上人を宗祖とす。親鸞の女、覺信尼、その門徒と協力して、本願寺を建立したりき。本願寺十一世、顯如上人の長子教如上人に及びて、別に、一寺を起せり。これ、家康の勸に従ひたるにて、即ち、今の西本願寺なり。西本願寺に對して、以前よりのを東本願寺とも稱するなり。これより、本支の分別なく、世に、東大谷派、西大谷派とて、兩派に分れ、門徒の多きこと、この宗にすぐるものなし。大谷とは、寺主の、近年、俗氏を稱したるに出でたり。堂宇の華麗、共に、天下無雙と稱せらる。○金閣銀閣 金閣寺は、鹿苑寺の一名、北山にあり。

應永四年、足利義滿の造營せしところ。銀閣寺は、慈照寺の一名なり。東山の鹿ヶ谷の北、淨土寺町にあり。文明年中、足利義政閑居の山莊にして、その死後、遺命によりて、佛寺となし、慈照寺と號せり。○清水 清水寺は、洛東清水坂の東端にあり。延曆年中、田村麿の造營にかゝれりといふ。殿堂、壯大雄偉なり。南面の懸崖に架したる舞臺より、遠望すれば、河内の金剛山、大和の諸山等、皆、一眸の中にありて、風景絶佳なり。○仁和 仁和寺は、北野神社の北にあり。光孝天皇の御宇、仁和四年の創建にして、宇多法皇、こゝに宮殿を造營せられたれば、世に、御室、又、大内山など稱せり。朱雀天皇も、讓位の後、こゝに宸居を定められき。故小松宮彰仁親王も、一たび、入りて寺務を執り給ひしかば、世に、仁和寺の宮とも申し奉りき。境内、櫻樹多きを以て、有名なり。○大徳寺 紫野大徳寺といひならはせり。紫野に在ればなり。大燈國師妙超の開基にして、醍醐天皇の御宇、正中元年の創建たり。○嵐山 愛宕山の南方にあり。満山悉く櫻樹にして、青松その間に交り、大井川その麓を環流す。白沙青苔、山紫水明、ことに、櫻花爛漫の時を以て絶勝とす。秋葉の觀、又、頗る佳なり。○御室之櫻 仁和寺の櫻は、その種類、異様にして、樹幹甚しく生長せずして、枝葉、滿幹に横生するを以て、風趣、頗る妙なり。且つ、花を看ることも、また、甚、多しとぞ。○梅尾 高尾之嶺 共に愛宕山の支脈にして、清瀧川の上流にあり。これに横尾を加へて、世に三尾と稱せられ、觀楓の勝地として有名なり。三尾の中、梅尾は、最も、北方にあり。○四條之納涼 四條河原の夕涼とて、古來有名なることなり。名所圖繪に、「河原夕涼は、陰曆六月七日より始め、十八日に終る。東西の娼家妓館より、磧の中に、床几を

設け、客を延くとぞ」とあり。今も、七月の初に至れば、河中の磧上、無数の飲食店、見せ物など、假小屋を列ねて、賑へり。○圓山の眺望 八阪神社の東方、智恩院の南に接する地をいふ。舊名吉水、亭館園林の設、備りて、眺望の絶佳なること、京都第一と稱せらる。○古歌云都之春成錦 古今集、素性法師の歌に、「見渡せば、柳さくらを、こきませて、都ぞ春の、にしきなりける」とある歌を引ききたるなり。○西陣 市の西北隅に位す。應仁文明の亂に、山名宗全この地に陣したるより、地名となれり。西陣織の機業は、遠く海外にも知れ渡りたる程にて、實に、京都繁盛の要因をなすものなり。紋織、生紋羽二重織、縹子織、縮緬織、博多織、天鷲絨織、木綿織、刺繍、絞縷等の織物を産す。○絛織 絛、音ジン、「機縷也」と字彙に見ゆ。糸織物のこと。○友禪 友禪染の略。元祿頃、宮崎友禪といふ京都の織工の發明せるよりいへるなり。○鴨川染 友禪染の一種。○渲法 渲、音セン、渲刷の法なり。字書に「擦以水墨、再三而淋之、謂之渲」と見えたり。

一六、香港

○作者船越衛氏は、もと廣島の藩士なり。大村益次郎につきて、洋式兵法を學び、明治元年兵部省に出仕し、五年陸軍大丞に轉ず。二十一年元老院議官となり、同年十一月歐米各國に差遣せらる。後、各縣の知事に歴任し、今現に宮中顧問官たり。功を以て華族に列せられ、男爵を授けらる。

○香港 清國廣東省にあり。皇紀二千五百〇二年、彼の有名なる阿片戦争の結果、英國に割讓せり。○阿片の亂 英國、漸く、東方を經營し、印度に於ける勢威、盛大に赴くに從ひて、支那との通商も、盛大に赴くに至りしが、當時、英人が清國に輸出する、重なる貿易品は、阿片にして、その害毒、甚しかりしかば、宣宗の時、林則徐を兩廣總督に任じて、その輸入を禁せしめたり。是に於て、林則徐は、外商に逼りて、その所有の阿片を出さしめ、悉く、これを燒棄せしが、猶、密賣を企つる英商ありければ、遂に、全く、英國との貿易を禁するに至れり。こゝに、英將ブレメン、軍艦十五隻を率ゐて來侵し、廣東、厦門、定海等を陥れしかば、清國は、止むことを得ずして、和議を結ばしめ、香港を英國に割讓し、上海、寧波、福州、厦門、廣東の五港を開き、償金二百萬兩を出して、事止みぬ。これを阿片戦争といふ。時に皇紀二千五百〇二年なり。○不毛 公羊傳宣公二十年の註に、「不毛者、磽确、不生五穀」とあり。瘠せたる土地をいふ。○上海 清國江蘇省に在り。揚子江口に近し。支那通商碼頭中、最も繁盛を極め、百貨常に輻輳し、實に、清國内外貿易の中心たるのみならず、實に、東洋貿易の第一市たり。同地には、我が領事館あり。○山縣伯 元帥陸軍大將侯爵山縣有朋なり。○桑港 卷二、一〇、「亞米利加行の話」の條に出でたり。○渡邊書記官 渡邊國武氏のことならむとおもはるれど明ならず。○波蘭 は、歐洲の國名。露帝カザリン二世、夙に雄圖を懷き、大に東歐を経略せむとす。西紀一七六三年、波蘭王オーガスタス三世歿して、系嗣定らず。國內騷然たり。カザリン機に乗じて兵を送り、その臣スタニスラスを立て、王となす。波蘭人喜ばず。相率ゐて亂を起す。露國直に兵を出して、クリミ

ヤ半島を征服し、また、希臘人を煽動して、反旗を翻さしむ。普魯西王フレデリック、埃太利王マリヤテレサ、露と合議して、一七七二年、波蘭の一分を分割せり。波蘭は、自國の分割せられたるを憤り、漸次、普國と親交を結び、その後援によりて、新憲法を定め、國政を改革せしかば、露帝は、普國が、佛國と戦へるに乘じ、新憲法を悦ばざるを徒を煽動して、亂を作さしめ、兵を以て、これを援けしかば、一七九三年に至り、又、その土地を割譲せり、波蘭の志士悲憤に堪へず。再び起ちて露人を殺害せしかば、露國は普國二國と連合して、一七九五年、悉く波蘭の領地を分割して、波蘭は、遂に滅亡せり。○アルサス、ローレンス もと、佛蘭西の領地、今は、獨逸に屬せり。その來歴の梗概を述べれば、一八六七年ルクセムブルグ公國購買問題より、端なく佛帝ナポレオン三世と、普相ビスマルクとの間に衝突を來し、續いて、西班牙王位相續事件破裂し、佛國は、遂に普國に向ひて開戦を宣言し、ザールブルッケンを占領せしが、普將モルトケ巧に兵を用ゐ、爾後、佛軍、毎に利あらず、佛帝、遂に、普軍に降り、一八七一年一月、巴里、また陥りしかば、佛國、遂に、和議を乞ひ、アルサス、ローレンスの二州を割譲し、又償金五十億フランを出せり。有名なる普佛戦争、これなり。○周の頑民は、殷の忠臣なり 伯夷叔齊などのことを指していへるならむ。○虚無黨 露西亞に在る黨派の名。アレキサンダー二世の温和政策に反對し、露土戦争の失敗を機として、一八七八年に、急激派の、新に組織せしもの、即ち、この虚無黨なり。常に社會の秩序を破壊せむことを圖り、巧に秘密手段を用ゐて、當路の重臣を暗殺し、一八八一年、皇帝も、また、遂に、その毒刃に罹りて崩せり。

一七、濠洲航路

○濠洲 即ち、濠太刺利亞のことにして、オセアニア中の一大島なり。英國の殖民地にして、ヴィクトリヤ、ニューサウスウェールズ、クウィンスランド、南濠太刺利亞、西濠太刺利亞の五大區劃に別れ、各、皆、政府及び議會ありて、國政に任じ、大英國皇帝の任命せる總督ありて、これを統ぶ。氣候酷熱にして、植物よく繁茂し、また礦物に富めり。従つて、又、牧畜に適せり。こゝを以て、牧羊業、農業、鑛業、頗る盛なり。ことに羊毛の輸出業、最も盛なり。廣さ、およそ三百萬方哩人口は、殖民人三百萬人、土人三萬人ばかりなり。○日本郵船會社の定期船 日本郵船會社の定期船は、政府命令の下に、航海をなす所の特定航路なり。○メルボルン ヴィクトリヤ州の首府なり。本文の末節にくはし。○マニラ オセアニア州の中なる東印度群島中のヒリッピン諸島の、最大なるルゾン島の首府にして、人口三十萬ばかり、砂糖、米、麻布、及び煙草の産地として有名なり。もとは西班牙領なりしが、米西戦争の結果、近年北米合衆國の領地となれり。○木曜島以下 は、皆、本文にあり。なほ、その條下に説明す。○ヒリッピン群島の西南なる瀬戸 ヒリッピン群島中、ルゾンに次いで大なる、ミンダナオ島の首府ミンダナオの西南にあるバジランといふ瀬戸なり。○土人 ヒリッピン群島の土人は、マレー、及び、ネグリの二人種なり。○ヨーク岬 本文挿畫中、木曜島の前面に突出せる三角形の半島なり。○トールレス海峡 ヨーク半島と對面ニューギニアとの間にある海峡にして、挿畫中、航路線を引きたる所なり。○赤道を距ること

十度餘 赤道より南に十度餘距りたるなり。○ブリスベーン 人口八萬餘あり。○シドニー邊より云々 シドニーは、ニールサウスウエールスの首府にして、人口四十萬餘あり。○ブラジル國のリオジャネイロ港 ブラジル國は、南亞米利加にある共和國にして、面積三百二十二萬方哩、人口千四百萬餘あり。住民は、おもに黑人種にして、また、ラテン人、葡萄牙人多し。各種の農産物に富み、ことに咖啡は、その産出高、世界の總産出高の一半を占めたり。リオジャネイロは、また單にリオと稱す。ブラシルの首府にして、リオ灣に蒞み、人口三十六萬あり。灣口には、花崗石の絶壁、峙ちて、堡砦の状をなし、府の背後には、丘陵山嶽、相連りてこれを擁し、風光明媚にして、また錨地の安全なる良港なり。○北米のサンフランシスコ、シカゴの兩市 北米は、即ち北亞米利加合衆國なり。サンフランシスコは、合衆國のカリフォルニヤ州にありて、太平洋に蒞める港なり。シカゴは、ミシガン州にありて、ミシガン湖にのぞめる市なり。兩市は、ともに新開の市にして、短日月の間に、おそろしき盛況を呈するに至りしを以て、かくいへるなり。○ゴボ島燈臺 ゴボ島は、挿畫中、航路線の南に當れる小島なり。その下に當れる、やゝ大なる島は、即ち、タスマニヤなり。○ウイロン岬 メルボルンの東南に當りて、挿畫中航路線のかゝれる所なり。

一八、相州洋

○作者大槻清禎は、字を瑞郷、通稱を恒輔といひ、西磐と號す。仙臺山目邑の人なり。家、世々一

郷の名族たり。西磐、江戸に學び、昌平黌の書寮に寓し、はやく學名あり。後、帷を神田小川街に下し、門人、頗る多く、才名、日に高し。西磐、また、經世の志、厚く、節を屈して、泰西の譯書を読み、各國形勢の畧を研めて、西洋新史の著あり。安政四年二月二十四日歿す。年僅に四十。同族大槻磐溪、門人と共に厚くこれを葬る。

○淹留 爾雅釋詁に、「淹、留久也」とありて、左傳僖公三十三年の條に、「吾子淹久於敝邑」とあり。淹また奄に作ることもあり。○綆 綆は、説文に、「汲井索也」とありて、もと井水を汲むに用ゐし繩をいひしを、通じて大きな繩をいふやうになれり。○力挽 挽は、音ベン、字書に、「引也」とあり。○海島皆走 船の走ること早くして、左右の海島皆走るが如きなり。○蜿蜿 韻會に、「蜿々、龍狀也」とあり。また、「蛇行蜿々」などいふ用法もあり。物のうねりゆくさまをいふことばなり。○十州三島 十洲記に、「漢武帝聞王母說、巨海之中有三祖洲、瀛洲、玄洲、炎洲、長洲、元洲、流洲、生洲、鳳麟洲、聚窟洲、此十洲乃人跡稀絶處」と見え、史記秦始皇帝紀に、「徐市言、海中有三神山、名曰蓬萊、方丈、瀛洲、僊人居之」と見えたり。○簸蕩 簸は、播と同義に用ゐらる。即ち簸蕩は、動搖する義なり。○頭涿 涿、音シン、「涙下貌」と、字書にあり。轉じて痛むの義に用ゐらる。こゝにても、イタミとよませたり。○寔 音シヨク、是、此などの義に用ゐらるゝ虚字なり。こゝにては、マコトニとよませたり。○覓 音ケイ、廻と同義なり。こゝにては、ハルカニとよませたり。○辰時 朝の五時、即ち今の午前八時。○申時 夕の七時、即ち今の午後四時。○五時 辰時即ち五時より、五時半、四時半、四時半、九時半と數へて

七時の申時に至るまでの五時、即ち、古の時の數にていへるなり。

一九、船室の記

○作者池邊義象氏は、熊本の人、大學古典科に學び、國文學者として名あり。高等學校、女子高等師範學校等の教授に歴任せしが、先年職を辭して、佛國に遊學し、歸朝して、今は文筆を事とせり。佛國風俗問答は、作者が海外遊學の折の紀行と、その見聞記とを集めたる書なり。

○わが乗れる船 インブレッヌ、オヴ、インディア號なり。この船は、インブレッヌ、オヴ、ジャパン號、インブレッヌ、オヴ、チャイナ號と共に、太平洋を往來する、三大船の一にして、長さ、四百八十五尺、幅、五十二尺、一萬馬力にして、噸數六千六百噸、一時間に十八ノットより十九ノットを走る。船長以下役員二十六人、多くは、英國海軍士官なり。厨丁火夫、凡そ百三十人乗れりとぞ。○甲板汽船の上層、一面に板を張りつめたる處。○鐵筆 ベンのことなり。○落機山^{ロッキン} 北亞米利加の西部を縦斷せる大山脈。○トランプ 西洋の骨牌なり。○ボーイ 給仕なり。○スーブ 英語にして、肉、又野菜などを煮出し、多少、調味したる汁なり、今訛りて、ソップといふ。○ホミネー 玉蜀黍飯なり。○ピアノ 英語なり、譯して洋琴といふ。オルガンに似て大に、音律、更に、清緻妙微なり。卷一、一五「自然の音楽」の條に出でたり。○極樂園 英語のパラダイスの譯語なり。

二〇、交通

陸路

○近年鐵道といふもの發明せられてより 鐵道發明の事は、卷三、三〇、「ジョルジ、スチブソン」の條の本文にいはしければ参照せよ。○電氣鐵道の發明 最近の發明にして、フリーニング、ジエンキン、アイルトン、ブルリー三氏の共同の發明にかゝれり。西曆一千八百七十八年、獨逸伯林市に、萬國大博覽會の開設せられし際、はじめて、これを應用して好成績を得たりければ、爾來、あまねく、市街鐵道の如き、短距離の鐵道に應用せらるゝこと、なれり。

水運

○櫓船 櫓によりて、航行する船なり。○サイミントン は、英人にして、ダングラス侯の保護の下に、頻に、蒸氣船の製造を研究したる人なり。○スコットランド は、イングランド及びウェールズと共に、大英國を形成せる國にして、イングランドの北部にありて、西南は、ウェールズと相對せり。○ファルトン 佛國人にして、はやくより蒸氣船の製造に心を委ねて、發明せる所あり。嘗てナポレオン第一世に上奏して、これを軍隊の輸送に用ゐられむことを乞ひしかど許されざりき。後 佛國駐在の米國公使の知る所となりて、米國に行きて、その發明に苦心し、また英國に行きて、親しく、サイミントンの工場を訪ひて、大に發明す所あり。遂に一千八百七年の春、その發明せる蒸氣船を、ハドソン河に泛べて、好成績を得たり。○ハドソン河 ニューヨーク

市を過ぎて、海に入る河なり。○大西洋を横断云々 汽船の發明は、既に成效せられ、英、佛、獨の諸國、皆、これに倣ひて、その製造をつとめたれど、そは、皆、所謂、河蒸氣船にして、大洋の航海には用ゐられざりしなり。その後、一千八百十九年に、サバナ一號といふ船、亞米利加のサバナ港より、英國の利物浦に向け、大西洋を横断したれど、蒸氣力よりも、多く帆によりて風力を利用したるなりき。その後、またカナダの、ローヤルウィリヤム號といふ船、クエベックより、グレブセンドに向けて、航海をなしたれど、なほ未だ安全なる立證を得ざりしが、一千八百三十八年に至り、シリアス號及びグレートウエスタン號の、各、倫敦、ブリストンを發して、十七日、又は十五日にてニューヨークに達せしより、遂に、あまねく、世の認むる所となり、その後、二年を経て、定期の航海開かれぬ。

遞信

○澳太利の維納府とブリュセル府との間に云々 一千五百十六年フランス、フォン、タキシスといふもの澳太利皇帝マキシミアン第一世の保護の下に、兩府の間に、信書往復の制を設けたるなり。○海底電線の沈設 この偉業を完成したるは、米人サイラス、フィールドといものにして、一千八百五十四年以來、歐米間に、海底電線を架設する計畫を起し、六十六年に至りて、漸く、完成するを得たるなり。

二二、カムチャツカの犬

○カムチャツカ は、亞細亞洲の北東部にある、一大半島にして、その尖端、わが千島群島と相對せり。○橈をひかしまるが故に云々 カムチャツカは、その位置寒帯にありて、積雪多きを以て、その交通は、常に橈によりて、これを行へるなり。○三十キログラム 一キログラムは 1/30 貫、即ち、三十キログラムは、百十二貫強なり。○この犬のはじめて生るゝや云々 この犬はその生れたるはじめに當りては、いたく人をきらひて物におぢやすく、常に穴中にかくるゝを好む性あるものなり、されど久しからずして、その性質は除かれて、その美質の發揮せらるゝに至るものなり。

二二、駱駝説

○作者齋藤正謙の傳は、卷二、二八、「摩耶山」の條に出でたり。○駱駝 偶蹄類の動物にして、亞細亞、及び亞非利加の熱帶地方に産す。沙漠の運搬用として、大にその地方に重視せられ、呼んで、沙漠の舟と稱す。沙漠の人民は、常に、これに騎りて旅行し、また荷物を馱し、またその肉を食ひ、その乳を飲めり。皮は、以て良革を製すべく、毛は、以て最良の毛布を製すべし。駱駝の亞細亞に産するものは、兩峰駝と稱して、その背上に二つの隆起あれど、亞非利加に産するものは、獨峰駝と稱して、背上に一隆起を有するのみなり。○倍蓰 蓰は倍數の多きをいふ。孟子に、「或相倍蓰」とありて、注に蓰は五倍也とあり。倍數の多きに用ゐらる。○詭異 字書に、「詭は、異也、怪也」とあり。○瘞癡 瘞は、愚なり。禮記哀公

問に、「寡人恚愚冥頑」とあり。癡もまた愚なり。字書に「不慧也、神思不足也」とあり。○能察熱風能知伏流。熱風は、沙漠などにて起る、おそろしき風をいへるならむ。駱駝は、よく旋風の襲來を豫知する性あり。伏流は、沙漠などにて、稀にある泉流にして地中に埋没し居るを以て、人目にては、見出すこと能はざれど、駱駝はよくこれを見出して、以て一行の渴を醫せしむることあり。これをさしていへるならむ。○嗤笑 嗤音チ、「笑也」と字書に見ゆ。

二二三、小金原捉馬記

○作者佐藤垣は、通稱を捨藏、字を大道といひ、一齋又愛日樓と號す。江戸の人なり、はじめ、中井竹山に従ひて學び、また贅を林家に執る。後、擢でられて幕府の儒官となり、儒名、一世に高かりき。安政六年九月、年八十八を以て歿せり。著す所、言志錄、愛日樓文集等數十種あり。

○總之野曰「小金」 總は、下總なり。小金は小金原なり。下總第一の高原にして、千葉、東葛飾、印旛の三郡に跨れり。牧野は、分ちて。上野、下野、中野、印西の四牧となせり。明治二年、開墾局を設け、東京府下の窮民を移して、その開拓につとめしめしより、今は、開けて、數村をなせり。○龍種 曲禮に「馬八尺以上爲龍」とありて、すべて良馬をさして龍馬といへり。龍種は、良馬の種なり。○林莽 莽は、草の深き貌をいへり。楚辭に「草木莽々」などあり。○掀手 掀は、字書に「擧出也」又は、「以手高擧也」とあり。こゝにては、たゞ手を高く擧げの

意なり。○歎 音コツ、字書に、「忽也、疾也」とあり。○使蹄嚙之不暇也 「使不暇蹄嚙也」とあるべきを、倒置して巧を求めたるなり。

二四、レッシングの比喩談數則

○原作者レッシングは有名なる獨逸の文學者にして、名を、ゴットホルド、エフライムといふ。一七二七年に生れ、幼より、讀書を好み、長じて、マイセンのサクセン侯家の學校に入りて、希臘羅馬の古典を研究し、十七才の時、ライプチヒ大學に入學し、父の命によりて神學を研究せり。されど、性、文學を好みて、常に哲學、文學の研究にのみ、心を委ねたりき。その後、主として、批評の筆をとりて、文名一世に高く、又、創作に名あり。ゲーテ、シレルと相并びて、獨逸の大文豪と稱せらる。比喩談は、ファーベルといひて、動物をかり來りて、寓言をなしたるものにて、レッシングの作物には、この種のもの、頗る多し。

○鷺 形、雁に似て大く、全身白く、尾脚共に短く、頸長く、その歩む狀、あひるに似たり。背大く黄にして、上に瘤あり。頭は深黒なり。○鵝 すなはち、白鳥のことなり。秋冬の候、よく、田澤にあつまれり。瘤、雁よりも大く、鷺鳥に似たり。全身白色にして光澤あり。頸、甚だ長く、喙の本、額に近く、赤き瘤あり。喙は黒褐にして、脚は淡黒なり。○鷹揚 勢を得たること、又、立身出世することをいふ。詩經大雅に、「維師尙父、時維鷹揚、涼彼武王」とあり。傳に、「鷹揚、如鷹之飛揚也、涼、佐也」と見えたり。それより轉じて、細事に齷齪たらず、從容

として、追らざる様子をいふ。○優然 優は寛なりとありて、ゆつたりとしたる貌をいふ。○逍遙 あちらこちらと、歩みまはるさまをいふ。詩經鄭風に、「河上乎逍遙」説文に「逍遙猶翺翔也」とあり。又徇祥におなじ。○懼伏 廣韻に、「懼、懼也、怯也」とあり。懼伏は、懼れ、伏するなり。史記項羽紀に、「一府中皆懼伏」と見えたり。○悚然 シヨウゼン 懼る、貌なり。俗にぞつとするといふに同じ。

二一五、豪膽なる一少年

○エトラスカ國云々 古代羅馬に於ける伊太利北部に住せし人種にして、チベル河を界として、ラテン人種と相對したりき。この戦は、西曆紀元前五百年頃の事なり。○マチアス 名をカユースといひて、カユースマチアスといへり。○絶倒 こゝにては、驚のあまりの意に用ゐたり。○倉皇 蒼黃に通ず。字書に「急遽失錯貌」とあり。

二一六、波蘭懷古

○騎馬旅行 往年、福島中佐、今の陸軍少將福島安正氏が、單騎、歐州より、西比利亞地方を旅行せし始末を詠じたる新體詩の題目なり。この歌は即ち、その中の一節なり。

○獨逸の國も云々 福島中佐は獨逸の帝都柏林より發程して、この旅行の途に上られし故に、この句あり。○ほろぼされたるポーランド 波蘭滅亡の顛末は、前にあげたる一六、「香港」の條に

詳しくいへり。○鷓鴣 説文に、「鷓鴣小類^{イカルガ}班鳩」とあり。埤雅には、「臆前有白圓點文、多對啼、常向日飛、畏霜露、早晚稀出、有時夜飛、則以木葉自覆其背」とあり。支那の越國に多ければ、越雉ともいふ。我が邦には棲まず。詩などに、寂寞たる景を叙する時多く用ゐられたり。李白の詩に、「越王勾踐破吳歸、義士還家盡錦衣、宮女如花滿春殿、只今唯有鷓鴣飛」、竇鞏の詩にも、「傷心欲問前朝事、惟見江流去不回、日暮東風春草綠、鷓鴣飛上越王臺」などあり。こゝもこれ等の詩意を用ゐたるなり。

二一七、高德題櫻樹

○作者頼襄の傳は、卷三、三九、「鳥居勝高」の條に出でたり。

○兒島高德 備前の人、備後の三郎と稱す。その勤王の事蹟は、よく人の知る所なり。尊氏の叛くに及びて、また頻に、王事に勤めしが、遂にその終る所を知らず。○聞^ニ帝西遷 元弘二年三月七日に、後醍醐天皇の武士どもに護衛せられて、隱岐の國へ遷されさせ給ひしをいへり。○吾聞志士仁人云々 論語衛靈公の篇に、「子曰、志士仁人、無求生以害仁、有殺身以成仁」とあり。また論語爲政篇に、「見義不爲無勇也」とあり。○伏^ニ舟阪山云々 備前と播磨との境にあり。○杉坂 播磨の佐用郡にあり、江川村より、美作へ越ゆる山道なり。又、中山峠ともいふとぞ。○則已過矣 太平記には、「杉坂へ着きたれば、主上、はや、院の庄へ入らせ給ひぬと申しける間云々」とあり。院の庄は、美作國吉田郡にあり。○天莫^ニ空^ニ勾踐、時非^ニ無^ニ范蠡 勾踐は、越

の君主にして、范蠡はその謀臣なり。勾踐吳王夫差のために破られ、つぶさに艱難を嘗む。范蠡、よくこれを輔けて、頻に計を運らし、遂に、よく吳を破つてその志を成さしむることを得たり。この詩は、勾踐を以て天皇に比しまつり、范蠡を以ておのれに比して、天の決して、天皇の御志を空しくせざらむことをいひ、また、おのれの王事に心をくだけることを諷して、天皇の御志を慰めまつらむとせしなり。

二八、新宿御苑畢亮記

○作者三島毅は、字は遠叔、中洲と號す。岡山縣備中中島村の人。經學に明にして、かねて詩文をよくす。現に、東宮侍講たり。その著に、中洲文稿三冊あり。

○新宿御苑 武藏豊多摩郡内藤新宿にある帝國の御苑なり。○罫 音ヒツ、小さな網にして、長さ柄のつきたるものをいふ。されど實際罫を捕ふる網は、その口の大き、竪二尺五寸、横一尺五寸あり。○通鑑戰國紀 通鑑は、資治通鑑なり。二百九十四卷あり。宋の治平中、司馬光、詔を奉じて、戰國より五代に至る間の歴代の事蹟を編纂せるものなり。○安息日 日曜日のことなり。神の宇宙を造り給ふ時六日働きて、一日安息し給へりといへる耶蘇教國の傳説によりて安息日といひならはせたるなり。○扈從 「後從曰扈」と、字書に見え、司馬相上林賦に、「扈從横行」とありて、注に、「隨從天子逐獸横行也」とあり。○老羸 羸は、瘦也とあり。○内申 明治二十九年なり。○家鷺 アヒルなり。○成耦 「二人爲耦」と字書に見ゆ。こゝにては、たゞ互に組を

なせるをいふなり。○嬰鏢 嬰鏢は、字書に、「輕健貌」とありて、後漢書の馬援傳に、「嬰鏢哉是翁也」とあり。○有趙將廉頗之勇 支那春秋戰國時代に於ける、趙の勇將にして、趙の相、藺相如と相併びて、よく強秦の壓服に抗せしことは、人のよく知る所なり。

二九、一對の美談

○作者齋藤彦磨、通稱は、可伶、葦假庵、又、宮川舎と號せり。石州濱田の藩士、本居宣長、伊勢貞丈等に學び、山東京傳にも師事せり。天保年間、藩主の、奥州棚倉に徙さるゝや、共に從ひて行き、やがて、そこに歿せり。著書數十部、伊勢物語繪抄、さかのやまぶみ、神代餘波、諸國名義考、三哲小傳等、最、有名なるものなり。『嘉多比沙志』は、作者の隨筆にして、なにくれとなく、書きあつめたるものなり。作者の著書の中、最も見るべきものとして、世に有名な

○元祿 東山天皇の御代の年號。○亦穂の義士云々 元祿十五年十二月十四日、播州赤穂の遺臣、大石良雄等四十七人、高家吉良義央を殺し、舊主淺野長矩の讐を復せり。ことのおこりは、長矩、勅使饗應のことを掌りしが、その際、義央、長矩を城中に辱む。長矩怒りて義央を及したるより、大不敬に問はれ、即日、死を賜ひ、國を除かるゝに至れり。良雄、その家老たり。主家の再興を圖りしも、成らず。遂に、復讐に及ぶ、明年二月四日、幕議四十七人に自刃を賜ふ。良雄等、忠義貫徹、舉動詳慎なりしかば、舉世、賞讃して已まず。稱して、義士といふ。○目ざ

す敵 すなはち義央をいふ。○間十郎 名は光興、光延の子にして、赤穂四十七士の一人なり。父に従ひて、吉良家を襲ひ、槍を揮つて義央を刺し、その首を斬る。死する時、年二十六。○武林唯七 名は隆重、赤穂四十七士の一人なり。本姓は孟氏、その先は、明の杭州武林の人、父半右衛門、赤穂に仕へ、隆重、また、中小姓となる。吉良家を襲ふに及び、間光興と俱に義央を殺す。拘はれて、毛利氏の邸に在るや、詩を賦して曰く、「三十年來一夢中、捨生取義幾人同、家郷臥病雙親在、膝下奉歡恨不終」と。死する時、年三十三。○大石藏之助 播州赤穂藩の老職なり。名は良雄、父良昭、早く死せしかば、年十五にして、祖の祿を襲ぎ、藩主、正長、長矩に歴仕せり。良雄、性寛裕沈毅、時人、その技量を識るものなく、長矩、またこれを疎んず。良雄、益、韜晦す。元禄十四年三月、長矩、事を以て吉良義央を殿中に傷け、死を賜ひて國を除かるゝや、良雄、すなはち群臣を城中に會して、後事を議す、衆、遂巡遲疑して決せず。良雄、遂に同志の士四十六人を得、明年十二月十四日の夜、義央の邸を襲ひて讎を報い、細川利綱の邸に拘はる。利綱、よくこれに遇す。明年二月四日、遂に死を賜ふ。良雄、再拜して曰く、臣等、自ら極刑を分とす。然るに、今、自盡を賜はる。死して餘榮ありと。死する時、年四十五。良雄、畧、書史に涉り、甚だ、論語を好む。嘗て、業を伊藤仁齋に受けしが、一日、その講筵に侍して、時々微睡す。去るに及びて、衆、皆、これを笑ふ。仁齋曰く、小子、妄に笑ふなかれ。彼は庸器にあらず。必ず、よく、大事に堪へむと。果して、その言の如し。良雄、また、兵法を山鹿素行に學び、事を擧ぐるに及びて、悉く、その法を用ゐ、算に遺策なかりきといふ。遺言して、高輪泉岳寺なる長矩の

墓側に葬らしむ。これを弔する者、填湊して市をなしぬ。香火、今に至るまで絶えず。○大江朝綱 音人の孫なり。村上天皇の時、勅を奉じて、新國史、及び、坤元録を撰す。渤海使裴瑆を餞する詩の序に曰く、「前途程遠、馳思於雁山之暮雲、後會期遙、露纓於鴻臚之曉淚」と。瑆、感歎す。また、書を善くせり。左右中大辨を歴、參議兼備前守美作守等に任せられ、天徳の初、年七十二にして卒す。○小野道風 太宰大貳葛弦の子にして、好古の弟なり。書に名高く、遒勁神逸、古今に冠絶せり。而して最も、草書に妙なり。醍醐朱雀村上の三朝に歴仕し、正四位下内蔵權頭に至る。康保三年卒す。年七十一。後世、藤原佐理、藤原行成と併せ稱して、書道の三蹟といふ。○主上 村上天皇なり。○江談抄 三卷、書籍目録に、江談といふ書名見えたり。大江匡房の談話を筆記したるものなりといふ。それを、更に抄出せるならむ。

三〇、石狩の昔話

○作者の傳、及び、『な、し草』のことは、卷一、二、戸毎の國旗の條に出でたり。
 ○幸奈 幸震とも書く。十勝國河西郡にあり。○夕張 石狩國九郡の一にして、空知支廳に屬す。
 ○乙名 蝦夷族制階級の一にして、内地の士族などいはずが如きものなり。○内奈部 ナイタ
 イベとよむ。○志良鐵哥 シラテッカとよむ。○帶廣 オペロペロフとよむ。○佐幌嶽 十勝國
 上川郡にあり。石狩に跨る。高さ二八八〇尺。○色代 中世の語にして、會釋の意なり。式退と
 かくを正しとす。本義は、禮を正し、人を先にし、我を後にする義なるよし、和訓栞に見ゆ。○十勝

岳 十勝國上川東北に聳え、石狩釧路二國に跨る、高さ二五二〇尺。○辭令 挨拶のことなり。

三一、黄金の話

○作者神保小虎氏は、東京の人、東京帝國大學に入り、地質學を修む。明治二十七年、理學博士の學位を受け、現に、東京理科大學教授たり。

○金屬 すべての元素を金屬と非金屬とに區別す。元素は七十餘ありて、その中の十五を非金屬とし、他を金屬とす。金、銀、銅、鐵、ソヂウム、カルシウム等は、金屬元素なり。かく、元素を金屬、非金屬の二種に分つと雖も、實は、其間に判然たる區別を立つる能はざるなり。○鑽石 金屬を冶金採集し得る鑽石若くは岩石をいふ。○クロンダイク、カリフォルニヤ クロンダイクは、北米カナダのアラスカ州、ユーコン河の上流にあり。カリフォルニヤは、北米合衆國の西部太平洋に面する、一帯の連山地方なり。○北見、石狩の二國を以て云々 北見國枝幸地方は、一時、砂金の産額、非常にして、日本のクロンダイクなりと稱せられき。石狩國空知川附近もまた、砂金に富むといふ。○石英 六方形にして、硬度七、色は種々あり。陶器硝子等の原料に用ゐる。○黄銅鑛、黄鐵鑛 黄銅鑛は、銅、鐵、硫黃の化合物にして、製銅の原料なり。色は黄にして、眞鍮の如く、表面は、錆びて、赤紫等の色を呈することあり。足尾、別子等に産す。黄鐵鑛は、鐵、硫黃の化合物にして、その色黄なり。硫黃を含むこと多量なるを以て、製鐵の原料には適せざれど、硫酸を製するに用ゐらる。至るところの鑛山に産す。○佐渡の金山の如きも云々 昔、能登の國司、人を遣して、

金を佐渡に得たりといふこと、宇治拾遺物語に見えたり。こは、必ず、砂金のことならむ。又、佐渡志に、謙信の佐渡に金を採りて軍用に充てしことは、多くは、西三川の砂金なりといへり。近藤重藏の金銀圖録にも、西三河に砂金山あるよしいへれば、ふるくより、佐渡には、砂金を産せしなり。慶長六年よりは、相川の中山立合といふ山より、金鑛を採りて上納せしよし佐渡志に見ゆ。今、金北山より産する金額は、本邦第一と稱せらる。○亞米利加合衆國 合衆國にて、金の産出地は、カリフォルニヤ州を第一とす。その他、コロラド、モンタナ、ネバタ等の諸州、これにつぎて、また多量の金を産出す。○濠太利亞 濠洲にて、金の産出地は、ヴィクトリヤを以て第一とし、クウインズランド、これに次げり。○加奈太 は、北亞米利加にある、英國の領地にして、北米合衆國の北部に位し、面積、實に三百五十萬方哩あり。國內到る處、鑛物に富めり。されど、採掘の業は、未だあまねく行はれざるを以て、その産額、甚だ多からず。○キログラム 前の二一、「カムチカの犬」の條に出でたり。参照すべし。

三二、醫者傳

○作者中井積徳は、字を處叔、通稱を徳二といひ、履軒と號す。父登庵、兄竹山と共に、學名あり、大阪の人なり。宋學を五井蘭洲に學び、自ら群言を折衷して、別に一家の説をなせり。その文章、圓活にして、音致あり。近代の巨匠と稱せらる。履軒、恣貌魁秀、器宇、まことに、一世を睥睨する概あり。文化十三年、八十五を以て歿す。著書、七經雕題略、七經逢原、通語、傳

疑小史、恤刑茅議、攘斥茅議等あり。

○城西沙場 城西は、大阪城の西なり。沙場は地名、スナバとよむ。○巾而篩者 手拭をかぶりて粉をふるふものなり。○洩者 洩は、字書に、「水調_二粉麩_一也」とあり。水を加へて、そば粉をこねるものなり。○棍者縷者 棒を以て蕎麥粉をうちのばす者、それを糸の如くに切るもの。○淪者 淪、音ヤク、湯でるなり。○縞 音ピン、錢ざしなり。○踵門 孟子に「踵_レ門而告_二文公_一」とありて、注に「踵、至也」とあり。○輸之錢 字書に「輸、委也」と説きて、左傳僖公二年の條に、「秦於_レ是乎輸_二粟於晉_一」とあり。イタスとよむ。贈るの義なり。○戊 昔制宵五_レ時、今の午後八時にあたる。○市井 師古の解に、「市、交易之處、井、共汲_レ之所、因_レ井成_レ市、故名。」とあり。市井賤人は、所謂、町人の義なり。○己欲_レ達而達_レ人 論語雍也篇に、「夫仁者己欲_レ立而立_レ人、己欲_レ達而達_レ人」とあり。○駢肩於朝 駢は二馬を駕する本義、轉じて、朋比の意に用ゐらる。

三三三、食鹽

○蛋白質を溶解して云々 蛋白質組成の主要なる原料は、炭水素化合物、窒素化合物にして、ほゞ、卵白と同一なるものなり。適度の鹽分は、消化管をして、この蛋白質を血液中に吸収せしむる作用をなすものなり。○植物は主として、これを地中、または雨水の中より云々 植物は、地中の水に溶解したる鹽分を吸収す。さて、植物中に、鹽分を含有することは、その灰の中の無機物

中に、鹽分の含有せらるゝによりても知らるべし。○地層中を流るゝ泉の鹽分云々 山鹽の成立につきては、なほ一説あり。そは山鹽は、今、鹹湖に鹽類の生ずるが如くに、次第に堆積したりしものが、水成岩の間に、廣大なる地層をなすにいたりしものならむといふ。○結晶 液體若くは、氣體が、固體に變化する時には、各々特有なる一定の形をなすものなり。これを結晶といふ。たとへば、金剛石の八面體、鹽の六面體に結晶するが如し。○獨逸、支那等の諸國にては云々 獨逸のエステルライヒ、スタッスフルト等は山鹽の產地として有名なり。また支那にては、多額にはあらねど、所々に山鹽を産せり。○海水の中に含まれたる鹽分 海水中に含有する鹽分の量は海によりて多少の別あれども、内海は、最多量の鹽分を含むといふ。○十州鹽田 播磨、備前、備中、備後、安藝、周防、長門、阿波、讃岐、伊豫の十ヶ國の沿岸は、多量に鹽を産するを以て、名づけて十州鹽田といふ。明治十一年、十州鹽田會といふ製鹽に關する組合を設けて、井上甚太郎氏等その總代となり、盛に製鹽の獎勵改良等を計りたることありき。

三四、おかちの局

○作者成島司直は、東岳また翠麓と號せり。徳川幕府の奥儒者となり、命を奉じて、徳川實記を編述せり。文久二年八月二日歿す。年八十五。『徳川實記』は、徳川氏の興りし時代より、十代將軍家治の時までの事蹟を、諸家の記録を參酌して、編せしものなり。附録には、逸事異聞などを記せり。

○東照公 徳川家康の諡なり。家康の事は、卷二、一二、「家康幼時」の條に出でたり。○本多、大久保 本多、大久保とのみありて、誰を指せるにか、明ならざれど、本多正信、大久保忠世の二人をさせるもの、如し。○おかちの局 太田道灌の曾孫康資の女、年十三にして、家康に侍し、寵幸せらる。松姫君、市姫君を生みしが、共に天せり。依て、水戸中納言頼房を養君とせりといふ。家康の薨後、薙髪して、英勝院と稱し、寛永十一年、鎌倉扇谷に、英勝寺を建立す。同十九年八月二十三日歿す。年六十五。英勝寺に葬れり。委しくは、以貴小傳、柳營婦女傳等に見ゆ。○調理事をよく調へ理むる義より轉じて料理の義に用ゐらる。

三五、本多正信と加藤清正

○作者成島司直の傳、及び、「徳川實記附録」の事は、前の「おかちの局」の條に出でたり。
○二條 二條城なり。京都市二條堀川の西にあり。慶長七年、徳川氏の築くところ。明治十七年七月、離宮となれり。○加藤肥後守清正 姓は藤原氏、初の名は、虎之助、尾張愛知郡中村の人なり。幼より秀吉に仕ふ。征韓の役、先鋒となりて、殊功あり。向ふところ敵なく、明人、呼びて鬼將軍といふ。秀吉の死後、徳川家康に仕ふといへども、秀吉の舊恩を忘れず。慶長十年四月、侍従兼肥後守に任じ、從四位に叙せられたり。十六年五月卒す。年五十一。○本多佐渡守正信 初の名は、正保、又、正行、小字、彌八郎と稱す。三河の人なり。幼にして、徳川家康に仕へ、常に、左右に侍す。一向宗の亂、家康に叛きしが、大久保忠世、その人となりて惜み、家康に白し

て、その罪を赦さしむ。その後、寵遇、日に渥く、常に帷幄に侍して、機密に參し、智謀を以て、遂に、功臣の列に加へられたり。元和二年六月七日卒す。年七十九。○太閤 關白の子が、關白となりし時に、その父なる、前の關白を稱する號。こゝは豊臣秀吉を指す。○うたてさ ものごとの、一層すゝみて甚しくなることなれど、こゝは、いやらしさよ、おろかさよ、などの意に用ゐたり。○信玄謙信 武田信玄と上杉謙信となり。信玄、名は晴信、小字は勝千代、剃髮して信玄と號す。勇武にして機略あり。連年、上杉謙信と兵を構へて、殆ど虚日なかりき。天正元年四月、三河の野田城を圍みし時、流丸に中り、病みて卒す。年五十三。謙信、本姓は長尾、初の名は、景虎、後、輝虎と改む。越後の人なり。髪を剃りて謙信と稱し、また、不識庵と號す。性、廉直にして信義を重んじ、屢、武田信玄と戦ふ。信玄の死後、織田信長と會戰を約し、天正六年三月、期に先ちて死す。年四十九。○ひたぶるに ひたすらにおなじ。○武田勝頼 小字は四郎、信玄の第三子なり。庶子を以て家を繼ぐ。織田信長、徳川家康と兵を交へて大敗し、天正十年三月、天目山に走り、遂に自殺す。年三十七。○上野介正純 本多正信の長子なり。甫めて十九、家康に仕へ、寵遇、日に渥く、慶長六年、從五位下に叙せられ、上野介と稱す。家康、江戸より駿府に徙りし時、正純も從ひたりしが、後、江戸に赴きて執政となり。十五萬石を食む。元和八年、事に坐して罪を獲、出羽に流され、寛永十四年三月、謫處に死す。年七十二。○草創 ものごとの爲し始めをいふ。○重りかに 重々しく、輕卒ならぬをいふ。○駿河、江戸 この頃、駿河には、家康居り、江戸には、將軍秀忠居たり。○秀頼 豊臣秀吉の第三子、六歳にして家を嗣ぎ、内大臣となる。

石田三成等、事を誤り、遂に、徳川家康に討たれ、元和元年五月、大阪城陥りて、遂に、自殺す。年二十三。○小西 小西行長なり。秀吉に知られ、寵遇を蒙り、肥後半國を割きて封せらる。文祿の役、加藤清正と共に先鋒となり、武功あり。慶長五年十月、石田三成に黨して、徳川家康と關が原に戦ひ、大に敗れて逃走し、遂に捕はれて、三條磔に斬らる。○頬當 面頬といふ、兜に屬する具にして、鐵製にて假面の如く、顔一面に當つる者なり。頬以下のみなるを、目下の頬當、又は、半頬といひ、頤のみなるを、猿頬といふ。○甲 かぶとなり。正しくは、冑、又は、兜と書くべし。太平記などに、甲をカブト、冑をヨロヒと誤書せしより、後世、その誤を襲げるなり。○承け引く うべなふこと、今、承知などいふに同じ。

三六、韓國多虎

○作者大槻清崇の傳は、卷一、三七、「清正讀論語」の條に出でたり。

○加藤氏營 加藤氏は、即ち、加藤清正にして、豊公の征韓役當時のことなり。○負、嶋 「山曲曰、嶋」と字書にありて、孟子に「虎負、嶋」とあり。

三七、碧蹄館戰團

○作者菊地純の傳は、卷三、七「金澤八景」の條に出でたり。

○文祿之役 豊臣秀吉の朝鮮を討ちし役にして、諸將の海を渡りしは、文祿元年三月なり。○鼓

行 鼓は、俗に鼓に作る、革音の器なりと字書に見ゆ。つゝみを打て進むこと。○大同以東諸城 京城と平壤との間に七城を築きて、義統、長政、隆景、廣家等の諸將、之を守りしが、李如相、大軍を以て攻め來りしかば、皆、開城、臨津、坡州附近に集合したり。○小早川隆景 征韓の役、師一萬を率ゐて、海に航し、進んで、開城に入れり。たまたま、守備を徹する命を受けたるなり。なほ隆景の傳は、卷二、七、「元就戒諸子」の條に出でたれば、參照すべし。○三奉行 石田三成、増田長盛、大谷吉隆の三人なり。○李如松 この役、朝鮮の軍、支ふること能はずして、援を明に請ひしを以て、明主翊鈞、李如松をして諸軍を督して、これを援けしめたり。李如松は明軍の大將なり。○碧蹄館 漢城の西北坡州の南にあり。坡州、臨津を経て、開城に通ず。○立花宗茂、毛利秀包 立花宗茂は、幼より驍勇の譽高く、秀吉の寵任を受け、筑後三郡の十二萬石に封せらる。秀吉、嘗て、その勇を稱して曰く、天下の勇將は、獨り宗茂と本多忠勝あるのみと。征韓の役、小早川隆景、毛利秀包と共に、第七軍に將たりき。毛利秀包は、元就の第九子、隆景の弟なり。はじめ秀吉の毛利氏と和するや、秀包、質子となりて、秀吉に従ふ。秀吉、その材幹を愛し、秀字を授けて秀包と改めしむ。(はじめ名は元雄) 筑後の三郡に封せらる。○臨津 碧蹄館の北にあり。○坡州 臨津の南、京城より約七里のところにある。

三八、含蓄ある詞づかひ

○作者の傳、及び、『な、し草』のことは、卷一、二、「戸毎の國旗」の條に出でたり。

○含蓄 露骨に道破せずして、餘意を含むるをいふ。○ビスマルク ウィルヘルム一世に仕へて、首相たり。外交に長じ、武斷政略を施し、奥國を屈服し、次いで、有名なる普佛戦争によりて、佛帝ナポレオン三世の盛威を挫きて、これを降し、遂に、獨逸帝國建設の大業を成し、又、一八七八年の伯林會議によりて、露國を屈し、一八八三年には、奥以二國に説きて、三國同盟を組織し、縦横に、その手腕を揮へり。今の獨逸皇帝ウィルヘルム二世立つに及びて、退隱し、一八九八年七月三十日、逝く。又、卷二、八、「ビスマルクの幼時」を参照すべし。○佛帝ナポレオン三世 ナポレオン一世の甥にして、諸國に流寓し、屢、佛國に來りて、叛亂を起し、も、功を奏せず。一八四八年、國會選舉に際し、選ばれて議員となり、遂に、大統領に推薦せられ、一八五二年、人民の請願によりて、帝位に即けり。後、ルクセンブルク公國問題、西班牙王位繼承事件より、普國、難を構へ、一八七〇年、戰敗れて、セダンに圍まれ、遂に、普軍に降り、佛國は、帝室を廢して、共和政府を建つるに至れり。

三九、おのれを屈せよ

○ベンジャミン、フランクリン の傳は、この卷、二、「高價の笛」の條に出でたり。○ポストン 府 北米合衆國にありて、ニューヨーク市の東北に位し、大西洋にのぞめる、繁華なる市なり。○急坂に珠を走らしむるが如し 珠を急坂に轉すれば、碎けむこと、疑なし。その碎けざるもの、まことに千に一なるを期し難かるべし。これをかりて、比喻にいへるなり。徒然草に、「若き時

は、血氣、内にあまり、心、物に動きて、情慾、たほし。身をあやぶめて、碎けやすき事、珠を走らしむるに似たり」とあり。

四〇、送學生之東京

○作者山田球は、字を琳卿、通稱を安五郎といひ、方谷と號す。備中松山の人、佐藤一齋につきて學び、學名あり。明治十年六月、年、七十三を以て歿す。

○可愛之日 揚子法言に、「事父母、自不足者、其舜乎、不可得而久者、事親之謂也、孝子愛日」とあり。○定省温清 禮記の曲禮に、「凡爲子之禮、冬温而夏清、昏定而晨省」とあり。注に、「温、禦寒、清、致涼、定、其衽席、省、其安否也」とあり。○心神 神も心なり。○這念這は、此といふ語の俗語なり。

四一、忘却先生傳

○作者齋藤正謙の傳は、卷二、二八、「摩耶山」の條に出でたり。

○融 全く宴と同義なり。○夾袋 紙入なり。○乞假 金を借るなり。○靦 古文の睛の字なり。易の乾卦に「聖人作而萬物覩」とあり。○橐 財布の意に用ゐたり。○塵甌 甌は、こしきなり。貧窮して、こしきを用ゐることなき故に、塵埃に埋れ居る義にて、塵甌といへるなり。○罄室 字書に、「空也、盡也」とありて、左傳僖公二十六年に、「室如縣罄」とあり。こゝにては、空室、

即ち、貧窮にて、室中に一物もなき意なり。○晏如 字書に「晏、和也」とありて、詩經の衛風に、「言笑晏々」とあり。○大窪天民 大窪詩佛なり。又、詩聖堂と稱す。常陸の人なり。草書を善くし、詩を以て海内に鳴る。性、磊落飄逸、詩書を以て、天下を周遊し、奇行頗る多し。交る所のもの、皆、一時の俊秀。山陽、文晁の如きは、ことにその交深かりきといふ。○秦滄浪 尾張の儒者なり。名を鼎といふ。擧げられて明倫堂の教授となり、幾くもなくして罷めて、優游の間に一生を送り、頗る古書の校正に従事し、著す所、甚だ多し。天保二年七月、年七十を以て歿す。○呈文刺謁 呈文は、手紙の文をいふなれど、こゝにては、儀式たちたる書きつけの義ならむ。刺謁は名刺なり。

四二、カンニット、ヘルスターン その一

○槽櫃 うまぶねのことなり。説文に、「槽、畜獸之食器」方言に、「櫃 養馬器」とあり。晋桓温風魏武詩に、「老驥休槽、志在千里」と見えたり。○アムステルダム は、和蘭第一の大都市にして人口四十六萬、ザイデルジール灣頭に臨み、運河を以て、縦横に疏通せる、九十の小島に跨り、三百の橋梁を架して、市街を列ぬ。眞に奇觀なり。○交通の機關 往來の便利を資くる機關、譬へば、汽車汽船等の如きものをいふ。○綺羅錦繡 綺羅は、うすもの、錦繡は、にしき、いづれも、衣服の美麗なるを形容せる語。○まばゆし 光の、烈しくかややきて、正しく見難きさまなり。俗に、まばし、又、まぶしともいふ。○數寄 嗜好の意、ものすきといふにおなじ。○埠頭 波

戸場なり。船荷を揚げ卸しするところをいふ。○大厦 説文に、「厦屋也」とあり。集韻には、「大屋也」と見えたり。宏大なる建築をいふ。

四三、カンニット、ヘルスターン その二

○われにもあらで 己れを忘れて、夢中にての意。○花環 種々草花を集めて、作りたる輪。わが國にて、送葬の際、生花造花など贈るとおなじく、彼の國にては、この花環を贈るなり。○絶倒 前の二五、「豪膽なる一少年」の條に出でたり。○思ひむすばれて 思ひ亂れての意。○この無常の世に云々「人生如朝露」とか、「富貴能幾時」とか、古今東西、この意を語れるもの甚だ多ければ、こゝに、古人といへるは、汎く、古人を指していへるにて、誰とも定めたるにあらず。○翻然 幡然におなじ。孟子萬章章句に、「湯三使往聘之、既而幡然改曰、云々」とある、これなり。○諄々 會韻に、「忠勤之貌」とあり。孜孜におなじ。○三十年戦争 宗教媾和の後、獨逸は、姑く國內の靜穩を保ちしが、皇帝ルードルフ二世、漸く舊教を庇護するに及び、新教徒は、同盟を結びて、これに抗し、舊教徒、また、聯合して、兩々相對し、早晚、破裂を免れざる觀ありしが、佛王ヘンリー四世、新教徒同盟を援けむことを企てしかば、皇帝は、乃ち、西班牙と結びたり。是に於て、諸國は、獨逸の聯合を憂ひて、政教上より、これに干涉し、干戈結びて解けず、互に、勝敗ありしが、西班牙、遂に、兵を班つに及び、獨逸は全く敗明して、和を請ふに至れり。一六四八年、列國、乃ち、ウエストファリアに會し、媾和を議し、歴史上極めて重要な、

ウエストフリア條約を締結して、漸く、局を結べり。戦亂は、一六一八年に起り、條約締結まで、その間、三十年を費せり。獨逸は、この戦亂によりて、多數の人口を失ひ、田園荒蕪し、商工、また、振はず。その文化の、久しく發達する能はざりしは、全く、これがためなり。○三軍 周禮地官に、「五師爲軍」、註に、「萬二千五百人、周制、天子六軍、諸侯大國三軍、次國二軍、小國一軍」とあるより、後には、將軍の率ゐる師を、三軍と稱ふるに至れり。必ずしも、員數に拘はるにはあらず。

卷四 終

明治三十六年六月廿四日印刷
明治三十六年六月三十日發行

非賣品

編輯者 明治書院編輯部

東京市神田區錦町一丁目十番地

發行者 三樹一平

東京市神田區表神保町二番地

印刷者 三島宇一郎

同所 (電話本局二三一六番)

印刷所 弘文堂

不許複製

發行所 明治書院

東京市神田區錦町一丁目
電話本局二四三八番

